

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2014年4月12日

文責：JUN

「学び合う教室」へのスタートを

1 4月の大切さ

新しい年度がスタートしました。毎年繰り返していることですが、教師ならだれしもこれから始まる一年に期待を抱いています。意欲を燃やしています。たとえ昨年度の学級がおもわしくなかったとしても、今度こそという思いになっています。しかし、その期待感と意欲がなんとなくそういう気分になっている程度だと、新年度が始まって一週間もしないうちに失望に変わるかもしれません。何をどうしていくのか、どういう見通しのもとどういう手を打っていくのか、自分の何を变えたいのか、そういう具体的なものと取り組む決意が生まれていないとそうなります。

新しい年度になれば魔法のように状況が変わるわけではありません。ほとんどの人が担当学年や担当学級が変わったことでしょう。転勤により学校が変わった人もいるでしょう。そのことにより対象とする子どもの状況が変わったり、子どもと子どものつながりも学級編制替え等もあり変わったりしたことでしょう。そういう変化がこれまでとは異なる状況をつくるのではないかと思うから期待感が生まれるのです。しかし、この変化からよい状況を招き寄せるには、教師と子どもの新しい関係を築き、子どもと子どもの関係の組み直しを図ることが必須なのであり、何もしないで何かが変わるといった甘いものではないのです。

そう考えると、新年度になったばかりの今、教師としてどういうことに留意し、どういう取り組みをするかが決定的に大切になります。子どもたちは、そういう自分たちへの対応の一つひとつで、「今度の先生はどういう先生か」「何を大切にする先生か」といったことを無意識に受け取っていきます。「学び」に対する価値観や作法が生まれるのも、学年はじめのこの時期です。そういうことから考えると、この一か月がとても重要だということになります。大きく言えば、4月の一か月でこの一年間が決まってしまうかもしれないのです。

ところが、その一か月間、そのための研修をしない学校が多いのです。職員組織が変わったので学校内の役割分担を整備しなければなりません。行事や教育活動、授業、研修などの一年間の計画も立てなければなりません。PTAの組織づくりにもかかわらなければなりません。そういう諸々の事柄をこなすことに時間が費やされ、各学級・授業のことは教師任せになってしまっている、それが現状なのではないでしょうか。そうなってしまうことでこわいのは、子どもの状態とその子どもへの教師のかかわりについて検討されないまま、よくない状況がつけられてしまうことです。

忙しい4月であっても、それぞれの教室がどういうスタートを切ったのか、いま留意しなければいけないのはどういうことなのか、どういう取り組みこそ必要なのか、そういったことについてそれぞれの教師がしっかり確かめることのできる機会を設ける必要があります。たぶん、研究の年間計画等はできていないでしょうから、ここは管理職が研究担当の教師と相談して、なんとか工夫してその機会を設けてもらいたいものです。

2 「学び合う教室」に向かって

すべての子どもが安心して学べる教室には、良質の人間関係が存在します。わからないときはだれかが支えてくれ、一人では到達しにくい課題に向かうときは知恵を出し合える、そういう人間関係です。それがあから、だれもが安心して学ぶことができるのです。それこそ「学び合う教室」です。一年の始まりである4月は、そういう教室にするための手を打たなければなりません。それには、何が大切なのでしょう。

子ども一人ひとりと正対する

「学び合う教室」はどんなやり方をすれば生まれるのかと考える教師には「学び合う教室」はまずつくれないでしょう。

やり方で作られた「学び合い」は、学び合いという形の中に何人もの子どもを埋没させてしまうことになりやすいからです。

教室にいるすべての子どものことに心を砕いている教師の教室が「学び合う教室」をつくることのできるのです。

子どもの存在を大切に、学びを保障しようとする心持ちがあるから本物の「学び合い」が生まれるのです。

学級の出発にあたり、教師は、一人ひとり、すべての子どもに目を向け、心を砕かなければなりません。ちょっとしたことも見逃すまいと注意を払わなければなりません。

それは、学級のすべての子どもに正対するということです。

子どもと正対しても、捉えられること、気づけることはしているという自覚も必要です。

教師の目からみることのできる子どもの事実は、その子どもの事実の一部分です。

ときには、目に入ってきたことがその子どもの実像ではないこともあります。

子どもの事実はみえにくいものなのです。

だからこそ、みつめなければならないのです。心にかけてなければならないのです。少しでも知ろうとしなければならないのです。

人生は、可能性を求め探し続ける旅のようなものです。

教師も、教師としての自分の可能性を探し求めて歩んでいるのですが、同時に、子どもの

可能性も探し続けなければなりません。

それは、どんな子どものどんな事実に出合っても、可能性に向かって歩み続けるということです。

その願いと心持ちに裏打ちされた眼差しと子どもへのかかわりがなかったら、「学び合う教室」は生まれません。

すべての子どもと正対する、このことがすべての出発点です。

子どものことで本気になる

学級という「船」は、子どもたちが生み出す事実によって進んでいきます。

その「船」に、子どもたちの「意欲」と「ひたむきさ」があり、「探究」と「挑戦」があり、さらに「つながり」と「支え合い」が存在する、それが、「学び合う学び」に取り組む学級のすがたです。

そのように子どもが生きて活動している学級では、ドラマが生まれます。

心ふるわせる出来事が生まれます。

ドラマが生まれる教室には、子どものことで心を痛める教師がいます。

子どものために心を砕く教師がいます。

子どもの生み出す事実を胸を熱くする教師がいます。感動できる教師がいます。

それは、子どものことで本気になれる教師です。

子どもにさしずし、一方的に子どもを鼓舞し、子どもを叱り、教師の考えに従わせる本気ではありません。

子どもの生み出すものに対する本気です。

子どもは、自分のことをきちんとみてくれる教師を信頼します。

やってしまった行為に対して厳しい指導をされても、その奥で人間としての自分の存在をみてくれる教師を信頼します。

本気で自分のことを考えてくれる教師を信頼します。

すべての子どもに本気になれる教師によって、教室がすべての子どもの居場所になります。

すべての子どもに本気になれる教師によって、互いに大切にしようという空気が生まれます。

だれもが居場所感を抱き、だれもが大切にされていると感じる教室にならなければ、「学び合う教室」は生まれません。

わたしたちは、子どものことに本気になれる教師でなければなりません。

聴いてもらった喜びをすべての子どもに

「学び合う教室」にするため、まず目指さなければいけないのは「聴き合う関係づくり」です。聴き合う学び方が「学び合う教室」の土台だからです。

「聴く」ということは内面的な心の働きであるだけに簡単には育ちません。
ですから、どんな方法をとればと考えていては「聴き合う教室」は生まれません。
方法よりも大切なことがあるからです。その大切なことが粛々と実践されていけば、実現
までの歩みは異なっても「聴き合う関係」は生まれます。

方法よりも大切なこと、それは、「教師が聴く」ということです。

子どもが「聴かなければ」「聴きたい」「聴き合おう」と思うようになるには、「聴いてもら
ってうれしかった」という実感がなければなりません。

実感がないまま「やり方」としてつくられた「聴く」は、表面を繕うものになりがちです。

「聴いてもらってよかった」という実感があれば、その実感を大切にす心持が生まれ
ます。

「聴いてもらってよかった」と子どもが感じるような聴き方を真っ先に実践しなければな
らないのはだれでしょうか。当たり前のことですが、それは教師です。

子どもにとって、自分たちの先生に聴いてもらえるほどうれしいことはないのです。

たとえ間違いであっても、学びの深まりにつなげる聴き方・受けとめ方をしてもらえたら、
学びに対する自信が生まれます。

聴いてもらったことで仲間とのつながりが生まれたらそれは喜びになります。

教師が「聴く」ということは、それだけ大切なことなのです。

聴ける教師の教室では、子どもたちは「聴く教師のすがた」を毎日目にします。

聴いてもらっている仲間の様子も目にします。

こういうことが毎日毎日積み重なると、いつの間にかそれがこの教室のあり方になります。
それはその教室の「文化」だと言ってよいかもしれません。

「聴こう」という心の働きは、「聴く」という行為の積み重なりと、「聴いてもらってよか
った」という実感からしか根づきません。

その実感を率先して生み出さなければいけないのは教師です。

聴ける教師の教室でしか、聴ける子どもは育たないのです。

毅然として実行する

教師には、子どもに対する愛情に満ちた眼差しが必要です。

この子どもたちをよりよくしたいという思いのないところでは教育は成立しません。

愛情を抱き、よりよくしたいと思っている教師は、もし到底容認できない状況が子どもに
生まれたら心を痛めます。

ここから、教師は、自分との闘いを始めることになります。

子どもによくない状況があったら、子どもとの闘いと考えるより、自分との闘いだと思え

ることです。

子どもの事実によどのように立ち向かうか、それは教師にとって自分との闘いです。

今度のクラスが、子どもが口々にしゃべる騒々しいクラスだったという人もいます。

逆に授業になるとシーンとして無表情になるクラスだったという人もいます。

座ってられない子ども、わめき出す子どもがいて、その対応が大変だという人もいます。

子どもにつながりがなく、てんでバラバラになっているクラスの担任になった人もいます。

まずは、その状況を引き受ける気持ちをもつことです。

この一年、自分にできる限りのことをするという覚悟を固めることです。

そういう意味で、それは自分との闘いです。

特定の子どものことなら、その子どもの生い立ちや小さいときの対人関係、そして、それまでの学級における人間関係などのなかに、そうなる要素があったのかもしれませんが。

その子ども自体がどうこうではなく、環境なり経験なりのなかでそういうふうになる舞わざるを得ないからそうしているのかもしれませんが。

そう考えて、その子どもに深い眼差しを向け、その子どもとのかかわりを積極的に求めなければなりません。

粘り強く関係性をつくるためのアプローチをしなければなりません

一方、それが学級全体のことなら、悪しき状態は自分の対応によって変えることができると考えることです。

少なくとも、そのよくない状況を助長してしまうようなことになってはいけません。

よりよくする、その決意だけはもたなければなりません。

自分のできることを自分の能力いっぱいやっていこうと考えることです。

しかし、それは容易なことではないと覚悟することも大切です。

困難さに立ち向かうことで自分の力を引き出すことができると考えることが大切です。この考え方が教師として成長を実現します。

子どもに対して威圧的に指導する教師がいます。

それがすべてよくないとは思いません。強く叱らなければならないこともあるでしょう。

しかし、表面を繕うだけの威圧や、ただ感情的になる威圧には賛成できません。

そういう威圧に対しては、子どもは、教師の顔色をうかがっておとなしくしているだけになります。

子どものよくない状況に立ち向かう教師に必要なものを言葉で言い表せば、それは「威圧」ではなく「毅然さ」「揺るぎなさ」ではないでしょうか。

有無を言わず抑えつけるのではなく「こういうふうにしていこう」「しなければならない」と子どもに諭し続ける「毅然さ」と「揺るぎなさ」を発揮することです。

この「揺るぎなさ」がとても大切です。

性急に完璧な変化を求める万全主義はいけません。小さな兆し、小さな事実、小さな成長を大切に、一貫して一つのことを言い続けることです。

子どもへのアプローチを決してやめないことです。

教師があきらめたとき、子どもは乱れます。

ちっともよくなっていないのではないかと思えても、「揺るぎなく」求め続けるすがたを子どもに示し続けることです。

変わっていかないと感じながら、子どもの前では「揺るぎなく」対応するということがつらいことです。時には、自信を失いかけることもあるでしょう。

だから、自分との闘いなのです。

教師は、みんな、そのようにして闘って、教師としての自分を高めてきたのです。

ピンチはチャンスです。

とは言っても、闘いは苦しいものです。時には心が折れそうになるかもしれません。

そういうときに必要なのが、寄り添ってくれる、ともに闘ってくれる同僚です。

それは、子どもたちが「学び合い」をするのと同じことです。

人は、他者と共同体になることで、生きることを全うできるのです。

自分一人で取りこんで、絶望的にならないことです。

他者に頼ること、依存することは決して悪いことではありません。

「依存」を認めるところから「学び合う教室」が生まれ、すべての子どもの学びが保障できるのと同じように、依存できる同僚関係が教師の成長を実現するのです。

ただ、子どもに「毅然」と求め続けることは、ただ「こうしなさいと言い続けることだ」と誤解しないでください。

その間、どれだけ一人ひとりの子どもと対話したか、どれだけ一人ひとりの心根に触れたかが大切なのです。

前述した「正対する」「本気になる」「子どもの話に耳を傾ける」を背景とした「毅然さ」「揺るぎなさ」でなければなりません。

教師の言動の積み重なりが、教室に「価値観」をつくり出します。

その一日一日が始まりました。

「学び合う教室」は、その一日一日によって生みだされるのです。